

◆左京一条二坊十五坪の調査 —第269-1次・第269-13次

1 はじめに

今回の調査地付近は平城京の条坊復原に問題のある地域である。すなわち、南北方向に通る東二坊大路が、一条大路の位置で東に鍵の手に曲がった後そのまま北に延びるのか、それとも海龍王寺の北で再び西に鍵の手に曲がって正規の位置に戻るのか、一方東西方向に通る一条条間大路（外京では北京極大路でもある）がこの場所ですそのまま西に延びるのか、それとも海龍王寺の北辺に沿う形で南に鍵の手に曲がるのか、これらの点が未だ明確にはなっていなかった。

ところで、1996年4月に今回の調査区の西隣で実施した第269-1次調査では、鍵の手に曲がる溝を検出した。ここは東二坊大路が海龍王寺の北で正規の位置に戻り、また一条条間大路がまっすぐに平城宮に突き当たる場合の両大路交差点の南西部にあたり、この鍵の手状の溝は一条条間大路南側溝・東二坊大路西側溝の可能性が考えられた。今回の調査地は同じ想定に立った場合の一条条間大路と東二坊大路の交差点の南東部にあたる場所であり、一条条間大路南側溝・東二坊大路東側溝を検出する可能性があり、この地域の平城京の条坊を考える上で重要な成果の期待される地点であった。

2 基本層位

調査区の基本的な層序は、置土、旧水田耕土、床土、奈良時代の地山である橙褐色ないし橙白色粘土の順で、現地表面から調査区北端で約40cm、南端で約70cmで遺構検出面である地山面に達する。遺構面の標高は北端で約68.3m、南端で約68.0mである。

3 検出した遺構

検出した主な遺構は、奈良時代の柱穴5基、中近世の井戸5基、性格不明の中近世の土坑12基（円形土坑5基、

方形土坑2基、南北溝状土坑1基、不整形または全形未検出の土坑4基）などである。

柱穴のうち調査区北東部の2基SX6860は8尺の間隔で南北に並び、建物を構成した可能性が高い。また調査区中央北部の柱穴SX6876には柱根が残存していた。ただし、柱穴は深いものでも検出面から約40cm、浅いものでは約5cm程度残るのみである。

井戸はいずれも井戸枠は検出されず、素掘りの井戸と考えられる。検出面からそれぞれ約2m以上掘り下げたが底を確認できず、崩壊の危険があるためいずれも掘り下げを断念した。

4 出土した遺物

奈良時代の遺構面はかなり削平を受けており、床土の

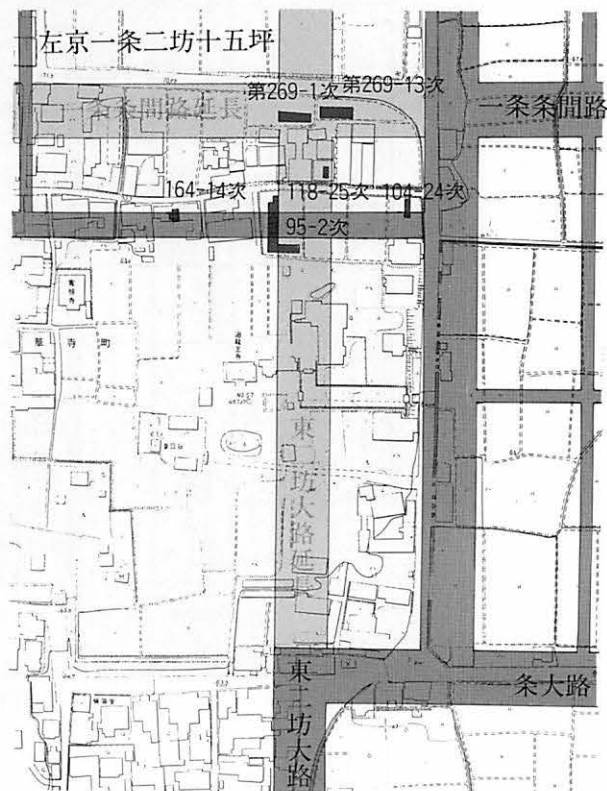


図27 第269-1・13次調査位置図

直下が地山面で、遺物包含層はほとんどなかった。従って、奈良時代の遺物はさほど多くない。瓦は表の通りで、特に調査区北端の井戸SE6869からの出土が多い。土器は少量で2基の土器据え付け穴の中近世の瓶がある程度である。この他、調査区西端の井戸SE6895からは内面に漆を塗った柄杓、井戸SE6869からは石製の浮き彫りの地蔵尊、五輪塔の地輪（方形石）2個、また南北溝条土坑SK6875からは同じ五輪塔の一部と思われる水輪（球形石）2個が出土した。これらはいずれも中近世のものと考えられるが、年代の特定は難しい。

5 まとめ

西隣の第269-1次調査で検出した鍵の手状の溝を一条条間大路南側溝・東二坊大路西側溝と考えた場合、今回の調査区は南側溝・東側溝の想定位置にあたるが、その痕跡は全く確認できず、逆に奈良時代の建物と考えられる柱穴を検出した。すなわち、海龍王寺の位置で東にずれた東二坊大路は一条条間大路以北で元の位置に戻らず、従来の想定通りそのまま北に延びるとみてよい。一方、一条条間大路も従来の想定通りまっすぐに平城宮に到達せず、東二坊大路より西では海龍王寺の北限に沿う形で南にずれると考えられる。すなわち、1975年の第95-2次

調査で検出した築地堀及び東西溝が、この地域的一条条間大路の南限であろう。従って、左京一条二坊十五坪は通常の坪よりかなり大きな面積を占めることになる、今回の調査地はその南東隅の一郭ということになる。

(渡辺晃宏／史料)

軒 丸 瓦		軒 平 瓦		丸 瓦	
形式 種	点数	形式 種	点数	重量	83.6kg
6291 A a	1	6721 D b	1	点数	286
6648 A	1	?	1	平 瓦	
型式不明	2	中世	7	重量	174.4kg
鎌倉時代	1			点数	660
中世	9			埴	
				重量	12.6kg
				点数	11
				道具瓦・その他	
				鬼 瓦	1
				面戸瓦	1
				文字瓦「法」	2
				道具瓦(鬼?)	1
軒丸瓦計	14	軒平瓦計	9		

表6 第269-13次出土瓦集計表

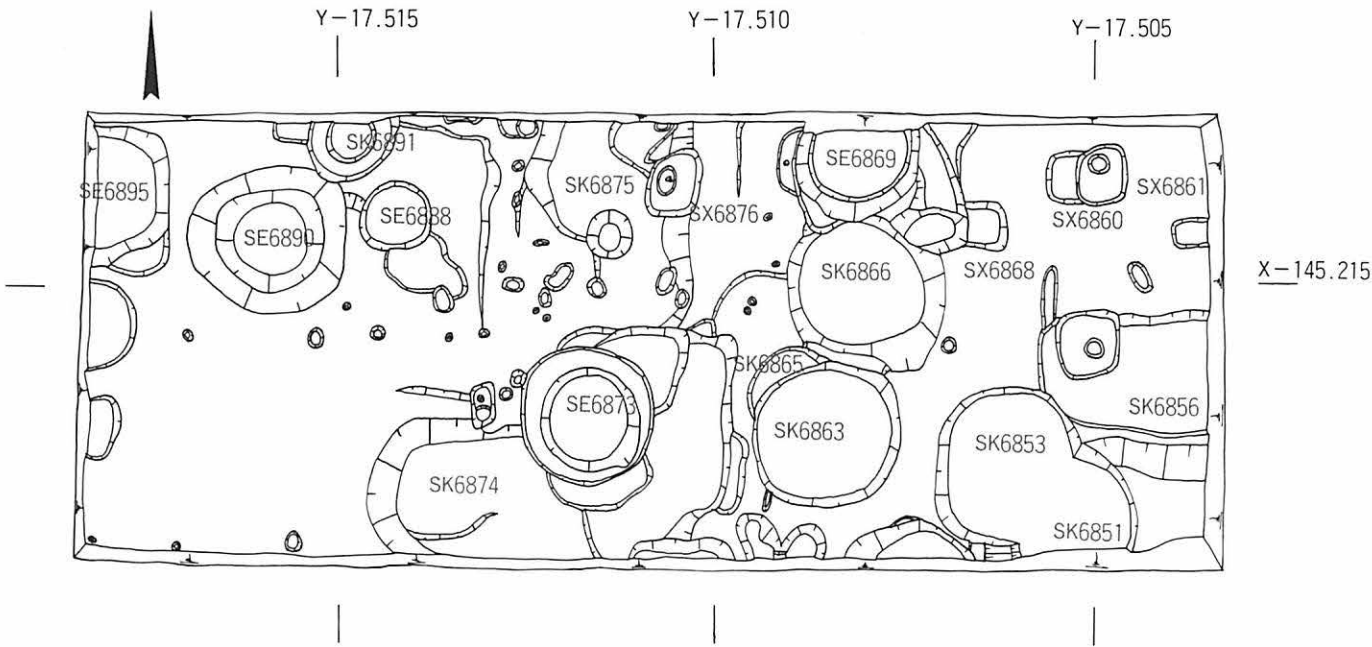


図28 第269-13次調査遺構図 1:100